

(修士論文概要)

小中連携による美術教育の研究

ー茨城県古河市における調査と実践事例を中心にー

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 光山明

序章

本研究は、小学校図画工作科と中学校美術科の連続性や接続性に着目し、小中一貫教育における美術教育の分析と、茨城県古河市における美術教育の現状・問題を質問紙調査等によって把握すると共に課題の克服を目指した実践の提案を通して、小中連携による美術教育の可能性について検討したものである。

義務教育の9年間の学びを一体的にとらえ、小中連携あるいは小中一貫の教育を推進することは、今日における重要な教育課題のひとつとされている。美術教育においても、小学校と中学校の学習内容は、関連教科として連繋が図られている。それぞれの校種間で教科内容の相互理解を促進し、教職員が連携し協力し合って教育を創造していくことが求められている。

これまでの美術教育における小中連携に関する研究をレビューしてみると、学習指導要領や教育行政のあり方など「制度」そのものについての研究、各学年の題材配列などの研究開発、特定の題材や教材を小中連携の視点から研究開発したものなどが存在する。一方、実際の教育現場でカリキュラムを運用する教員の指導意識に着目し、小中教員の相互理解を焦点とした研究は未開拓な分野であることが判明した。

先行研究において十分に解明されていない課題に対して本研究では、古河市の中学校生徒や教員へのアンケート、授業観察及びインタビューなどを実施し、それらの相関的かつ多角的な分析から問題点を考察していく。さらに、一連の調査研究を通して、仮説として導かれた小中連携を実現する理論や方法論に基づき、具体的な教育実践を提案することによって課題解決を目指すものである。

第1章 小中一貫教育における美術教育

ここでは、つくば市及びつくば市春日学園を事例とした調査により、小中一貫教育における美術教育の特質について明らかにしている。

小中一貫教育の取組を生かした美術教育の成果がいくつか確認された。第一に5年生からの教科担任制による、小中の連続性を生かした教科経営の実現である。第二に学校全体で取り組まれている「思考ツール」を使った学習、ICT機器の活用などの特徴的なカリキュラムが美術教育にも適用されていることである。第三の成果は、中学校籍の2人の教員が、小学校から中学校にかけての発達段階や連続性のある指導について意識するようになったことである。

小中一貫教育における美術教育の成果から本研究の課題を考察すると、小中それぞれの教員が、互いに異校種の教科内容や指導について理解し合うことや、指導方法の共有化を図ることなどが課題として浮かび上がってきた。

第2章 古河市における質問紙調査

第2章では、図画工作科・美術科の教育現場における実態を把握し課題を明らかにするために、茨城県古河市の小学校教員205名、中学校教員9名、中学校生徒3,337名に対して質問紙調査を行い、美術教育に対する意識を測定した。

小学校教員の調査では、楽しさや充実感を実感させる指導が実現している一方、絵の具などを扱うことに対する苦手意識から、描画指導に自信がもてない状況や、表現技能に関する指導方法についての研修を望む意識などを明らかにした。

中学校教員の調査からは、創造活動の喜びを味わわせる指導を重視している状況や、授業の秩序や学習態度の指導に重点が置かれることで子どもの自己選択力を生かすことができない現状を推察している。

また、中学校生徒への調査からは、中学校1年生時点で美術科に肯定的な意識をもっている生徒が多い学校は、中学3年生時の肯定感も高いことを分析した。また、図工は嫌いだったが中学校1年生で美術好きに転じた生徒では、鑑賞の楽しさに目覚めたり教員からほめてもらったりしたことがきっかけになっている実態が明らかになった。さらに、生徒

らが中学校の美術科に期待している意識について因子分析を行ったところ、「高度な表現への関心・意欲」、「造形活動の喜びへの期待」、「鑑賞活動への興味の高まり」という3つの共通する要因の存在を明らかにしたことが特筆できる。

これらのことから次のことが指摘できる。中学校で美術に前向きに取り組む生徒を育てるためには、小学校から中学校の接続期のカリキュラムを見直し、ゆるやかな接続が行われるようにすると共に、生徒の美術学習への期待に応える、ある程度高度な表現が行える授業づくりを目指す必要がある。また、生徒と教師の関係では、生徒の活動をほめ、認め、励ます言葉かけによって、美術を好きになる子どもが確実に存在することを念頭に、教師は子どもたちとのより良い関係の中で授業を創造していくことが求められている。

第3章 古河市における授業観察・インタビュー調査

前章の質問紙調査において、美術科を肯定的にとらえた生徒の割合が多かった2つの中学校を対象に授業観察と授業者へのインタビュー調査を実施し、指導内容や教師の意識、教師と生徒の関係などの観点から各校のカリキュラムの分析・考察をした。

この調査からは、学習者一人一人に合わせた徹底的な個別指導の重視と、生徒の主体的な活動を尊重する教師の姿勢、教師と生徒のゆるやかな信頼関係の構築などが、生徒の前向きな学習姿勢を育てていることを指摘した。また、近隣の学校の教員と連携を図り互いの実践に生かせるものを学び合い、各学校の教材開発に生かす有効性を述べた。加えて、中学校1年のカリキュラムは、中学校美術科に対するイメージを決定づけることにつながるため、慎重に検討の上、改善を図る必要があることを述べた。

ここでの授業観察とインタビューから新たに組上に載った小中連携に関する教育活動として、中学校教員による小学校への出前授業と、学校教育以外の機会での教員間の交流がある。これらについてさらに調査をする必要性を確認した。

第4章 連携に向けた教育実践の模索

第3章までの調査に基づく問題点の把握と改善への視点を踏まえ、第4章では、より実践的な提案を3点行っている。第1節は、小中教員によるカリキュラムの共同開発会議の分析である。ひとつの目的に向けて話し合う中で、それ

ぞれの固定化していた教育観や指導観に変容がみられ、小中の接続期におけるカリキュラムの見直しが実現する過程を明らかにした。さらに、本会議を踏まえ、接続期のカリキュラム開発の一般的な実施方法について検討しており、それぞれの学校現場で取り組める提案としている。

第2節では、中学校の美術科教員による小学校への出前授業の取組について具体的な事例に基づいて考察した。出前授業を通して小中それぞれの相互理解を推進するためには、小中教員の意識の違いを踏まえ、授業のねらいについて教員間で合意形成を図りながら取り組んでいく必要があることを指摘している。

第3節では、古河市を中心とする小中の教員が運営する美術展覧会の取組について考察した。調査対象である「先生たちの美術展」は、教員自身の作品発表に加え、教育的な視点の各種プログラムが実施されることが特徴である。ここでは、美術展の開催を通じた小中教員の協働によるカリキュラム開発の取り組みや、表現行為を通じた相互理解の深まりなどが見出されている。美術展の開催を核とした小中教員の取組が示唆するのは、図画工作科・美術科という教科の枠や小学校・中学校という制度の枠を超える、美術教育の特性を生かした連携教育の可能性である。

終章

終章では1章から4章までの内容をふりかえりまとめて論じた。以下は、特に第4章における各提案に基づく本研究の成果と主張点である。

「連携と接続」をテーマとした接続期のカリキュラム開発は、異なる指導意識をもった小中教員それぞれが、共通の目標達成に向けて相互理解を深め、指導内容を見直す取組として、小中連携のひとつの可能性を示した。

「専門性と相互理解」がテーマとなっていた出前授業は、子どもの学びを見つめることを起点として、小中教員のそれぞれのよさを生かす授業を創造できるならば、美術教育の可能性をより一層拡張できる取組であると主張したい。

「小中教員の協働」をテーマとした教員の美術展覧会の取組では、「美術」を通して交流することによって生じた、「校種を超えた同僚性」の存在が認められる。こうした教員間のつながりは、「小中の段差」、「教員の孤立」など、美術教育が抱えているいくつかの課題を乗り越え、様々な方面につながっていくより有機的な連携の形であった。